

調査研究

特集

人口資質論

—日本人口の資質と環境—

問題の所在

篠崎 信男

1) 概念と方論的問題提起

人口資質の概念については未だまとまったものがある訳ではないが1つの試みとして、筆者がある方向位置付けを行なったことがある。それは「人類系統発生による人間力を基盤として歴史的に生成展開した社会的、経済的、文化的所産を意義付ける人口の集団構造機能の総価値体である¹⁾」という事で抽象的表現となっているが、その中味は極めて重要な内容が盛られているものである。この一端を解説すれば、記述的説明と意義的説明に分れるが前者は主として事実資料を中心としての具像的な問題を求め、後者は主として内包している価値を中心として問題を求めるということである。すなわち時空系列の中で常に人間というものを中心座標にとって、個人、集団の生活者というものと周囲との相互関係の中に基本体を見出そうとする研究でもある。

したがって研究方法論としては従来言われているもの、すなわち Orientation, preparation, analysis synthesis, imagination, confirmation, hypothesis, actionなどを駆使するが、ただ以上だけでは自然科学及び社会科学の方法論のみで十分ということになる。そこでこの外に筆者が考えている方法論を二つ付け加えることにした。それが incubation と satisfaction である²⁾。incubation (熟化原則) は今日写真映像技術論で既に取りられている方法論であることを最近知ったが、筆者の言う考えは化学的思考ではなく発生学的思考であり、また satisfaction というのは単なる満足とか義務化法ではなく、 $+a$ を求める賠償願望法とでも言うべきもので、未来学的な研究法とも考えられる一つの新しいやり方である。

人口資質という極めて漠然とした対象に挑戦する時は、既存又は既成の枠組みの中に入るものみに限定しては駄目だということである。というのも、今日までの科学的研究対象は専ら物的対象、ま

1) 篠崎信男「人口資質理論の追求—人間観問題を中心として—」人口問題研究、第93号、昭和40年1月、1～18ページ

2) 篠崎信男「人口資質の現状と人口問題」……研究、第106号、昭和43年4月、30～43頁

たは可視的対象が中心で、一步進んでもイデオロギー的延長線上にある。

前に述べたように複雑化したものを単純化する方法論が今日まで優先させられてきているが、このため方法論的な枠組みに面倒な要因は消去してしまうことになる。このため逆に人口資質を捕えんとする手懸りを失ってしまうという危険性がある。今日遺伝学で、stochastic processing ということが問題化しているのも、Einkehr-Ein Deutbar (単一对応) では、人間生体原則に合致しないことが認識されたためではなかろうかと思われる。つまり物理理論や数学理論だけでは律し切れないものがあり機能理論や人間関係理論をどう組み入れたらよいかということである。例えば出生力低下の要因分析においてもデモグラフィックの点からは年齢構造の変動、結婚構造の変動など、各種の要因が考えられようが、さらに経済変動とか社会変動、文化構造や生物学的構造特に日常生活行動の問題などを考慮すると複雑化してこよう。したがって質というものが力というものと関係している以上、新しい力学ベクトル法とでもいべき開発研究も必要となってくると思われる。というのも現在相関係数という便利な指標もあるが、ある事象と事象との相関係数をとって、それが有意であるから相関があると断定することには、特に生物質を扱う人々からは批判がある訳で予め何等かの調査で関係ありと断定された時、どの程度かを数値でつかむのが相関係数で結果的な統計値であり原因的統計値ではないということなどが考慮されるからである。

2) 人口資質の現実的対応問題

以上のように資質という概念定義が未だ固まった訳ではないが、さればとて、理論や定義が定まらなければ研究出来ないというものではない、前節で掲げた参考文献に、曰く因縁を書いておいたので詳しくは参照されたいが、昭和2年から既に諸先輩諸氏が質的人口問題として論ぜられている。これから見ると、人口動態というものは人口資質研究の対象となっている。すなわち、出生、死亡、婚姻、離婚などがそれであるが、この外、体型、体力、教育程度、知能技能能力、さらには性格や意識といった面も資質的研究対象となり得るものである。つまり生体学的属性というものが第1義的に問題となるということであるが、これらの個別的な研究は各方面で細分化された形で研究実績があるが人口問題的には、これらの研究成果を如何に、生活者の集団としての人口の頭数との関係で理解したらよいかということである。生産者と消費者を兼ねる人口、つまりこれを私は生活者と呼んでいるが、この人口に、資質的な以上の要素が如何にからみ合っていくかが問われねばなるまい。

したがって人口資質というものが直ちに表面化されて出てくるものばかりではなく、寧ろ、人口の年齢別構成や関係の中に、ポテンシャルとして何が変動、または伝承されて行くのか、人口エネルギーとして何が策定されるのかといった問題が出てくる。物的再生産と人的再生産とは資質の領域でどう係り合っているのかという基本的問題の提起がなされる。

ということも、子供を産むよりも耐久消費材の方が優先されたから人口再生産は低下したとよく言われたことがある。この価値判断は個々の生活意識のふるいにかけて選り選ばれたものであろう。また昭和50年の国勢調査によれば、職業の小分類は286種になって示されているが、この中に従事する男女別、年齢別人口数は、前述した人口資質の属性から見て、物的再生産において効率化されたものかどうかということは、今後少産少死になった日本人口、さらには今後の高齢人口の増加に対して、人口の質的面からの再検討を迫られているからである。

人口資質の現状や、その変貌については前述した属性を中心として「40周年記念号」に略述したところであるが、問題はこのポテンシャル、エネルギーを今後、ダイナミックエネルギーへと転化せしめる方策こそが人口政策の重要な課題となってこざるを得ない。勿論、人口自体は、社会や経済、文

化の仕組みの中で、これと対応しながら進行せざるを得ないが、常に依存的結果現象と見るのか、因果プロセスの変動現象の一環と見るのかによって、それが資質の適応か順応か、または発現化かを一応判断する前提となる。

人口が増加しようと、減少しようと、死亡を出来るだけ最小限に止めるようにすること、また経済を安定させて生活水準を出来るだけ低下せしめないようにすることは、人口問題対策としてよりも、むしろ当然なすべき経済政策であり、衛生政策であると思うのだが、これが不如意になると人口問題に転化してくる危険性がある。

敗戦直後の生活環境が壊滅に頻した時は人口自体が人口をコントロールしたことは何か人口資質そのものが動いてこれらの行動を自主的に表面化したと考えるのは無謀であろうか……

個人、個人が何も人口問題から妊娠しようか、避妊しようかなどと考えて実行したのではないという故石垣純二理論は、生活者としての人口の質的問題に対する配慮に欠けていたからであり、また今日でも、一般大衆は人口問題という総合概念を常には握して日常生活行動をしているものではない。しかし何か日本人の自主的コントロールのあり方、特に昭和41年の丙午出生減少現象を見ると、内在した人口の質的ポテンシャルが、一つのチャンス을捕えて表面化したように思えて仕方がない。

このことは丁度、地球のマグマが蠢動してそのエネルギーが爆発放散して、地震とか噴火といった人目に触れる現象となって始めてその存在が分るといったものとよく似たものを感じる。人類の頭脳が発明し、発見し、そして創造してきた、生活形態、つまり政治機構や経済機構、社会機構から説明されるものより、むしろ、斯る諸多のあり方を産んだ。またこれを支えている。その原質が人口資質の実存ではなかったかと思われる。

別の言い方をすると、現象として、かく、あらしめられた存在に意義があるのではなく、かく、あらしめた存在に人口資質の本質の意義を求めようとするものである。したがって現実にある対象の元の素因と、その意義を追求することが肝要となってくる。それが現実の意味でその現実を価値付けるものだ考える。今日、フルブルーフと言い出されてきたのも何か人口資質というものの考え方が其処にうごめいてきたからではなからうか!?

人口問題研究所の「人口問題研究」で創刊号から取扱った出生力問題は計82篇に及んでおり、年報には51篇、研究資料篇としても25篇が出されているが総発表数から見ると12.5%しか研究結果が示されていない。しかも産児調節とか人工妊娠中絶の研究も入れ、紹介資料を入れても僅かである。また死亡問題は関連した生命表などの作成発表や自殺、死産問題をも含めて計72篇しかなく研究論文中5.7%に過ぎないし、結婚—離婚の問題は配偶関係別の関連論文、通婚圏、血族結婚の問題を入れても48篇に過ぎず総計の3.8%である。

前述した人口動態統計の事項を総計しても全体の22%しか研究論文がないということで、特に結婚問題に関する研究は過半数が戦前の研究である。いわんや人口資質の他の属性要因事項についての研究は皆無に等しいと言ってよい。出生力の問題を論ずるなら、その前提要因である婚姻—離婚の問題をも含めてさらに追求することが当然と思われるが、事實は余り突込んでいない。つまり前述した結果現象の統計的処理に終わっている。横断面的な空間序列統計論が中心で、時系列的連応論に乏しいということである。今日、コーホート別分析とか言われてきたのは、こうした統計処理に対する反応修正と見られないこともあるまい。

研究所に人口資質部という部門が設定されたのは昭和38年4月であった。筆者の行なっている研究内容が主として人口資質に該当すると当局が判断したためと思われるが、この部門の初代部長として本問題に没頭することになったが、部科に資質科と能力科がついた。しかしこの二つの科の関係意味

も極めてあいまいである。というのは資質が底にあって力が湧出し表へ力として出てくるのが能力なのか、そうした力が先づ底にあって資質というものが培養されるのか問題が残る。とすれば、これらの科に属する人々は、それなりに判断して自分の問題意識を持ち、問題対象に挑戦しているとしたか思われたいが、この問題もコンセンサスを得る必要がある。しかし現状の統計的操作のみではなかなか対応の仕方にも限界があるのではなかろうか、日本では心理学者が人口問題を取扱うものが皆無である。アメリカでは stephan という人がこれに取り組んでいるが、それは各要因別のモデル図式から入っている。それを将来、実体調査によって、各要因の連関度を確かめようとする試みのようであるが、こうしたことも今後日本も考えて行かねばなるまい。また社会心理学も、今や人間の具体的行動から入って行こうとしている。

また pohlman という心理学者も人口問題としてよりも出生計画の心理学として取扱っているが、4つの事項に焦点をあてていた。すなわち「子供についての妊娠に対する両親の欲望とその底にある動機」「子供を妊娠する現状とそれ以後の両親にとって心理の不利益」「欲しない子供に対する両親の敵意の心理的効果」最後が「効果的な調節実行と関連する他の心理的要因」である。つまりこの最後のものを決定するために3つの前の理由の前提があるようであるがまだ具体的質量化はなされていない。

とにかく質的量化ということは、これを現実化するためには既存資料からだけではなくどうしても質的な問題意識に応じた問題発見実体調査が必要となるということである。

人口資質というものへの突込み方の手懸りとしてマルサス理論の原点をみつめて、ある理論構造のモデルを作ったことがある³⁾。

それは人間の欲望というものを第1義的要因と見る態度で、この欲望実現の過程で資質能力と関連してくる。こうした合成物が現実の与えられた諸々の生活環境条件因子とからみ、満たされざるものが教育程度のふるいにかけて性格を形成し、それが再び選択力、判断力、知性に影響を与えずにはおかないように思われる。こうしたことを個人レベルでなく集団レベルで捕えんとする所に人口資質問題研究の1つの課題がある⁴⁾。

3) む す び

本稿は人口資質論という所内のシンポジウムの前提文として問題の所在の輪廓を示すために書いたものであるが、日頃考えていたことをまとめたものに過ぎない。しかしシンポジウムのテーマを見ると、遺伝学、食生活、保育環境、教育水準、結婚—通婚圏—といった面から議論されるようである。これを少し、まとめると、生体論的ライン、環境対応論的ライン、資質培養論的ラインに分れているようでもある。一般に生活とは衣、食、住と言われるが、もう1つ性がなければならぬ。統計的資料から言えば結婚離婚である。

出生と死亡は、今泉洋子の中に入り、食は内野澄子のところ、住は広島清志のところで教育程度は若材敬子で、結婚—通婚圏は清水浩昭のところで論ぜられるかも知れないが離婚という問題もあって欲しいと思う。

人口資質は生活の場の中で到る所で働らき表面に出てきたり、或はまた潜在したりしている。と考えられる。単なる形式論の説明でなく今までの研究成果をふまえて、それが数値的に述べられなくても、報告者が研究している中に、これが1つの資質の表われであるというところを発見して貰いたい

3) 篠崎信男「人口問題意識と人類働態論」人口問題研究、第126号、昭和48年4月刊、10~13ページ

4) 篠崎信男「母性意識形成の構造的分析」—人口資質問題の一環として—一大東学園刊 昭和53年6月刊

と思う。

人口資質というものを掲げたシンポジウムは今までになかった。始めから結論を得ようとは誰も思はないし、また思いようもない。だが所内で考えたことを一步一步やること、つまり人口資質については専門家はいいこと、すべて layman として述べてよいのである。

ただ今後は人口の質的な問題は増加する。新しい分野の開発という点で研究所員の関心を高めたいと考える。